北海道立教育研究所

所長室通信

第６号
2024.3.1

変革期の校長に大切にしていただきたいこと③

自身が「腹落ちしたビジョン」を魅力的に伝える

ビジョンには様々な定義がありますが、本稿では、「目指す状態を分かりやすく、かつ、魅力的に描いたもの」とします。

校長がビジョンを構築することや伝えることを怠ると、必要性や方向性がわからないまま校内で取組が進められ、混乱が生じます。また、教職員のモチベーションが上がらず、やらされ感や負担感が生じる原因にもなります。

校長の皆様は、こうしたことを踏まえ、新たな取組や大きな変化を伴う取組を始める際、または、取り組んでいる途中において、目標を実現するまでのプロセス、最終的に実現した状態や得られる成果などのゴールイメージをビジョンとして示し、学校全体で共有されていることと思います。

さて、皆様の学校の教職員は、そのビジョンに魅力を感じ、積極的に取り組んでいるでしょうか。

優れた校長は、ビジョンが魅力的に感じられるよう、ポジティブな表現で伝えることはもとより、教職員のモチベーションを高めるために様々な伝え方を工夫しています。例えば、会議やスピーチ、日常の会話などの機会に、繰り返し伝えます。例え話やストーリーを用いてわかりやすく表現します。特に重要な内容は、場面やタイミングを選び、熱意をもって話します。

とはいえ、こうした工夫を凝らしても伝わらないことがあります。それはなぜでしょうか。要因としては、ビジョンそのものに問題がある場合が多いのです。ビジョンに校長自身の教育観や価値観が反映されているでしょうか。そのビジョンに校長自身が魅力を感じ、納得し、腹落ちしているか、改めて確認することが重要です。
本心と異なることをビジョンとして説明しても伝わりません。むしろ逆効果になることもあります。校長の魂のこもったビジョンこそが教職員を動かすのです。

（文責：北海道立教育研究所　所長　中澤美明）